

〈黄帝と老子〉雑観 第4回

『黄帝内経』に近いのは『老子』か『莊子』か

重層的な無の宇宙論と遍満する気の宇宙論

『黄帝内経』 研究家 松田博公

ツイート 0

第1回 [黄帝は誰のことかと黄帝は言い 『黄帝内経』は天人合一の医書である](#)第2回 [『黄帝内経』は養生の書にあらず](#)第3回 [『黄帝内経』はタオの医学書なのか？ 『老子』『莊子』そして『荀子』](#)

前回の末尾で、『黄帝内経』の主調音は儒家か道家かなど、諸子百家の分類に囚われた方法では、その思想は読み解けない、戦国から漢代を席卷した、横断的な統合思想のミッシングリンクを探さなければならない、と述べた。

これは、高校教科書レベルの中国古代史常識からは外れているだろう。いや、中国学の大家たちも、曖昧なのである。学者の著書、論文は、ほとんど諸子百家の時代がそのまま秦や漢の帝国に移行したかの印象を与えている。もちろん学者は、先秦～漢代に時代の変化を象徴する大きな文献が生まれたことを知っているが、それを踏まえて、戦国末には諸子百家分立は終わり、思想統合運動が起こり、思想史の段階区分が変わったと明快に解説してくれる著述はほとんどない(注1)。中国歴史学の分野でこの位相転換がクリアに把握されていないために、医学思想史の分野でも、『黄帝内経』に影響を与えた思想には、儒家もあれば道家もあり、陰陽家もあれば兵家もありと諸子百家の名をばらばらに挙げるだけの旧態依然とした分析が、中国でも日本でも主流なのである。

今回は、この問題に切り込む導入部として、読者のみなさんが関心を持っているだろう『老子』と『莊子』を取り上げよう。『老子』と『莊子』は、ひとくくりに老荘思想と語られる。では、『黄帝内経』と親和性があるとされてきた老荘思想で、より近いのは『老子』か『莊子』かといえ、だれしも、『老子』をイメージしてきたのではないだろうか。

確かに、『黄帝内経』には、一見、この見方を根拠づけてくれそうな



今週号のPRの部屋はこちら
●東京九鍼研究会／実践鍼灸講座 4月スタート

- ヒューマンワールドのセミナー
- [変形徒手矯正術セミナー](#) (2014/7/6)
- [ダイエット・アロママッサージセミナー](#) (2014/8/24)

- ★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)
- ★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集
週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

★詳細は»» [こちら](#)

★メディカル求人天国

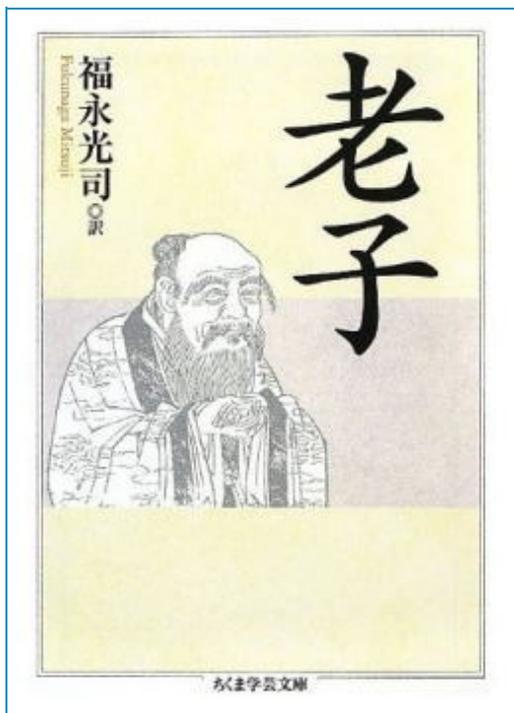
『老子』からの引用がある。

鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は»» [こちら](#)

前回、言及したように、『老子』77章の「天の道は、高き者はこれを抑え、ひくき者はこれを挙げ、余りある者はこれを損し、足らざる者はこれを補う」は、『素問』至真要大論篇の「高き者はこれを抑え、ひくき者はこれを挙げ、余りあるはこれをくじき、足らざるはこれを補う」の補寫論に引かれ、64章の「いまだ乱れざるにこれを治す」は、『素問』四気調神大論篇の「聖人はすでに病むを治せずして、いまだ病まざるを治す。すでに乱れるを治せずして、いまだ乱れずを治す」に採用されている。

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は»» [こちら](#)



また、80章、「その食を甘とし、その服を美とし、その居に安んじ、その俗を楽しましむ。隣国あい望み、鶏犬の声あい聞こえて、民、老死に至るまで、あい往来せず」という「小国寡民」の理想郷の描写は、『素問』上古天真論の「故に其の食を美とし、其の服に任じ、其の俗を楽しみ、高下相い慕わず。其の民、故に樸と曰う。是れ以て、嗜欲（しよく）も其の目を勞すること能わず、淫邪も其の心を惑わすこと能わず、愚・智・賢・不肖も物に懼（おそ）れず。故に道に合す。能く年皆百歳を度（こ）えて而かも動作衰えざる所以は、其の徳全くして危

うからざるを以てなり」の精神修養論の素材となっている。

しかし、一つの思想が他の思想と近いとは、お互いの重要な構成要素が関連していることを指すのであり、単に引用されているからではないはずである。ところで、『老子』の思想の特徴が「タオ（道）の思想」であることはよく知られている。それは、次の言葉に凝縮されている。

「道は一を生み、一は二を生み、二は三を生み、三は万物を生む」（42章）「天下の万物は有より生じ、有は無より生ず」（40章）「無名は天地のはじめ」（1章）「無為にして為さざるなし」（48章）

目に見えているこの世界（一、二、三）の根底にタオ（道）という、見えず名前を持たないがゆえにおのずからなる生成のダイナミズムを宿した無の領域がある。あらゆる存在は、この無の領域から生まれ、無に復帰する。『老子』以前に、だれもこのような重層的な宇宙論を語りはしなかった。この思想によって、『老子』は中国古代思想の革命者となる。

◇『老子』のタオは無の宇宙論

この『老子』思想の核心が、『黄帝内経』にどう反映されているかといえば、反映されていないのである。可視的な世界の根底にすべてを無化するタオという宇宙的生命の領域があるという思索は、『黄帝内経』にはない。『黄帝内経』と『老子』はどうやら宇宙論が違うのである。

無とは何もないことではない。漢代からさまざまな解釈が施され、定義は一定しないが、構造化され、名付けられない生命力に満ちた混沌を想像しておこう。そこから気の秩序が生み出される。すべてがつながった気のゆるやかな全体性、一である。次に天地、陰陽に分かれ、二気感応して第三項が誕生し、やがて万物が万物と関係して次々に生命が生まれる。この自動生殖する『老子』の宇宙は、絶えず現在を否定し、母なる無名性へと復帰し続ける永劫回帰する宇宙でもある。『黄帝内経』には、こうした深淵といおうか、存在の秘密の奥底を洞察しようとする類の宇宙論はないのである。

こうした『老子』思想の真髄に照らせば、上に紹介した、補寫論、未病治論、精神修養論にかかわる章句は、派生的、技術的な言葉に過ぎない。じっさい、『黄帝内経』は、この『老子』の永劫回帰する無の宇宙観を軸に体系を立てようと思えば、そうできたはずである。それは、恐らく別系統の自然治癒力の医学を生んだだろう。それを考えることは、わたしたちの未来医学の課題であり、いずれこのシリーズでも議論することになるだろう。

そうだとしても、技術論と哲学的真髄がまったく無関係というわけではない。『老子』は、天地宇宙は、ただ無欲に運行して、万物を生み出し育むと洞察し、それを、聖人（君主）の生き方のモデルとし、人民統治術でもある無欲清静の精神修養論を打ち立てた。それは、『黄帝内経』にも導入されているとされ、よく知られた『素問』上古天真論の次の章句も、『老子』思想と解釈されてきた。

「恬淡（てんたん） 虚無なれば真気これに従う。精神内を守れば、病安んぞ従い来たらんや。是を以て志閑にして欲少き、心安んじて懼（おそ）れず、形勞して倦まざれば、氣従い以て順なり。各々其の欲に従い、皆願う所を得る」

しかし、これも『老子』ではないのかもしれない。無欲清静の教えは漢代以降、道家として分類された戦国時代の思想家たちに共通していて、『莊子』ももちろんそうであった。ということで、ちょっと、『莊子』を覗いてみよう。

「平易恬淡なればすなわち憂患入る能わず、邪氣襲う能わず。静かにして陰と徳を同じくし、動いて陽と波を同じくして、天の理に従う」（刻意

篇)

「夫れ、恬淡寂寞（せきばく）虚無無為、此れ天地の平にして、道德の質なり」（刻意篇、天道篇）

このような語彙からして、『黄帝内経』の恬淡虚無の教えは、従来考えられていたのと違って、直接には『莊子』から採られている可能性がありそうなのである。

◇『莊子』のタオは宇宙に遍在し氣に満ちる

とすると、『黄帝内経』と近いのは、『莊子』なのだろうか。ということで、『莊子』の検討に移ろう。『老子』と『莊子』の思想がかなり違うことは、今では常識である。インターネットを検索するとそれを論じたブログが幾つもある。

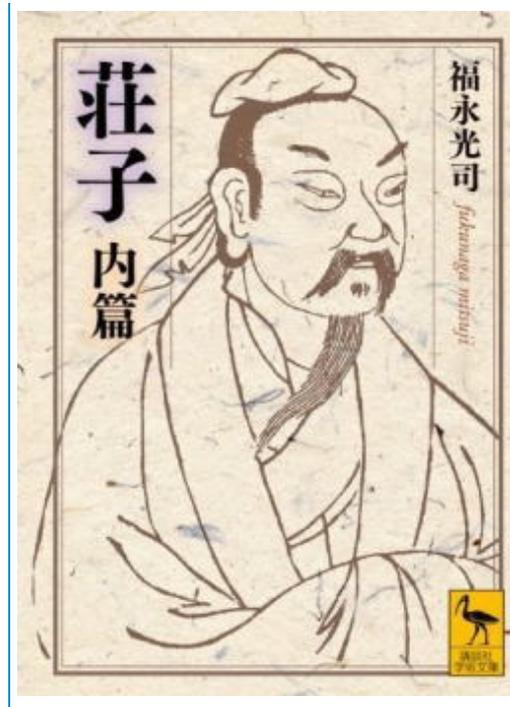
<http://roushiweb.com/category1/entry91.html>

<http://enokidoblog.net/sanshou/2013/09/9767>

そこでは、『老子』は国家統治や処世術など世俗への関心が強いのに対して、『莊子』は世俗を超越した精神の自由への志向性が強いなどの区別が論じられている。今回、わたしたちにとって重要なのは、両者の交錯する宇宙論の差異である。上に見たように、『老子』の宇宙論はタオ（道）を基底に重層的な構造をしていた。『老子』は氣の思想書でもあり、42章、「道は一を生み、一は二を生み、二は三を生み、三は万物を生む」に続けて、「万物は陰を負いて陽を抱く。冲氣（ちゅうき）はもって和をなす」と言っている。タオとそれが生んだ陰陽の氣とは段階を異にし、氣もまた重層的に捉えられている。いっぽう、『莊子』の宇宙論においては、タオは宇宙に遍在し宇宙はタオに満ちている。重層的ではなく、全一的なのである。それは、次の言葉からうかがえる。

「東郭子、莊子に問いて曰く、いわゆる道はいずくにか在る、と。莊子曰く、在らざる所なし、と」（知北遊篇）

ここは、このあと、「道は瓦礫にあり」、「屎尿（＝大便、小便）にあり」と下ネタに落ちていくが、笑ってはいけない。実は、禅仏教にも引き継がれた悟りの境地の開陳なのである。タオは目に見えず、形はなく、言語を超え、大宇宙から身の周りのささいな出来事にも充ち満ちている。となれば、『莊子』がタオと気を密接に結びつけるのは当然である。気も目に見えず、形はなく、宇宙のどこにも満ち、万物を一つに繋いでいるからである。



「人の生は氣の聚（あつ）まれるなり。聚まれば則ち生と為り、散ずれば則ち死と為る。若し生死、徒（＝仲間）たらば、吾又何をか患（うれ）えん。故に万物は一なり。（略）故に曰く、天下を通じて一氣のみと。聖人は故に一を貴ぶと」（知北遊篇）

『莊子』はタオと気を同体と意識し、宇宙の真理タオを悟るためには、心齋、坐忘と呼ばれる気と一つになる修行をせよという。このような技法に触れているのも、『老子』と異なるところである。

「なんじは志を一にせよ。之を聴くに耳を以てする無くして之を聴くに心を以てせよ。之を聴くに心を以てする無くして之を聴くに気を以てせよ。聴くことは耳に止まり、心は符（し）るに止まる。気は虚しくして物を待（うけい）るるものなり。ただ道は虚しきに集まる。虚しきこそ心齋なれ」（人間世篇）

心齋により、万物に繋がる気そのものとなり、タオを体得し、生死を忘却し、道の一氣に遊ぶ者。それが『黄帝内経』上古天真論篇にも登場する真人である。

「彼（＝真人）はまさに造物者と人（＝仲間）と為りて、天地の一氣に遊ぶ。彼は生を以て附贅縣疣（ふぜいけんゆう＝こぶやいぼ）と為し、死を以て決丸潰雍（けつがんかいよう＝かさぶたが破れ腫れ物がつぶれる）と為す。（略）芒然として塵垢の外に彷徨（ほうこう）し、無為の業に逍遙（しょうよう）す。彼れまたいづくんぞ能く貴貴然（かいかいぜん＝仰々しい）として世俗の礼を為し、以て衆人の耳目に觀（しめ）さんやと」（大宗師篇）

さて、このようにタオと同体と捉えられた気は、集まっては生命となり散っては死をなし、春夏秋冬の四季のような循環を永遠に繰り返す。莊子

の妻が死んだときのことである。友人の恵施が慰めに訪れると、莊子は盆を叩いて歌っていた。恵施が君には悲しむ心がないのかとなじると、莊子答えて曰く。

「是れその始め死するや、われ独り何ぞ能く慨然たることなからんや。その始めを察するに、本（もと）生なし。徒（いたずら）に生なきのみに非ずして、本、形なし。徒に形なきのみに非ずして、本、気なし。芒忽（ぼうこつ＝一瞬）の間にまじわり、変じて気あり。気、変じて形あり、形、変じて生あり。今また変じて死にゆく。これ相ともに春夏秋冬、四時の行をなせるなり」（至楽篇）

このように気は季節と連動した循環するリズムを持っている。この気は、その精微なる「精」とともに、天地、陰陽に分かれ、上下に運動し、寒暑燥湿風雨などの六気となり、五穀を実らせ、人々の健康を左右し、疾病の原因ともなる。『莊子』の気は、天道の理法に従い、自然の法則性を宿している。

「（黄帝曰く）吾れ天地の精を取り、以て五穀をたすけ、以て民人を養わんと欲す。吾れまた陰陽をおさめて以て群生（＝あらゆる生きるもの）を遂げしめん（＝生をまっとうさせる）と欲す。之を為すこと奈何（いかん）」（在宥篇）

「雲将曰く、今、我れ願わくは六気の精を合して以て群生を育まん。之を為すこと奈何」（在宥篇）

「人、大いに喜ばんか、陽を破らん。大いに怒らんか、陰を破らん。陰陽ともに破るれば、四時（＝春夏秋冬）至らず、寒暑の和成らず、其れかえって人の形をそこなわんか」（在宥篇）

「上りて下らざればすなわち人をして善く怒らしめ、下りて上がらざればすなわち人をして善く忘れしむ。上らず下らず身に中たり心に当たればすなわち病をなす」（達生篇）

◇『黄帝内経』のタオは自然の法則性

これだけ見てくれば、冒頭の、『黄帝内経』に近いのは『老子』か『莊子』かという設問には、すでに答えたも同じだろう。

「上古の人、其れ道を知る者は、陰陽に法り、術数に和し、食飲に節有り、起居に常有り、妄（たばかり）に労をなさず。故に能く形と神と俱にして、盡（ことごと）く其の天年を終え、百歳を度（こ）えて乃ち去る」（『素問』上古天真論篇）

「陰陽なるものは、天地の道なり、万物の綱紀、変化の父母、生殺の本

始、神明の府なり。病を治するに必ず本（＝陰陽）を求む」（『素問』陰陽応象大論篇）

「道は、上は天文を知り、下は地理を知り、中は人事を知らば、以て長久たるべし」（『素問』著至教論篇）

『黄帝内経』のタオ（道）は、『老子』のように、宇宙の基底に存在する無の深淵ではなく、『莊子』のように見えている宇宙万物と同体である。そして、『黄帝内経』の精、気は、『莊子』のそれと同じく、天地、陰陽、春夏秋冬のリズムという自然の法則性に順い、上下に循環して生命を生み出し、体内でも同じ運動をして、人を健康にも病気にもする天道の理法なのである。

「天地気を合する、これを命（なづけ）て人という。人よく四時に応ずる者は、天地これが父母となる」（『素問』宝命全形論）

「故に清陽は天と為り、濁陰は地と為る。地気は上りて雲と為り、天氣は下りて雨と為る。雨は地気より出で、雲は天氣より出づ。故に清陽は上竅より出で、濁陰は下竅より出づ。清陽は腠理に発し、濁陰は五蔵に走る。清陽は四支を實し、濁陰は六府に帰す」（『素問』陰陽応象大論）

「謂う所の耳鳴るとは、陽気万物盛上して躍（おど）る。故に耳鳴るなり。謂う所の甚しきときは則ち狂巔（てん）疾するとは、陽盡（ことごと）く上に在りて陰気従いて下り、下は虚し上は実するなり（＝上実下虚）」（『素問』脈解篇）

『莊子』の「天下を通じて一気のみ」という命題は、後世、宇宙万物の一切は気であるとする気一元論の嚆矢とされているが、『黄帝内経』の気論も同じ範疇にある。『靈樞』が黄帝にさりげなく語らせている、精・気・津・液・血・脈は一つらなりの同じ気であるとする次の章句は、『莊子』の気一元論の延長にあるものとして、もっと注目されてよいだろう。

「人に精・気・津・液・血・脈ありと聞くも、余こころみに以為（おも）えらく一気のみ、と。今すなわち弁（わかち）て六名となす」（『靈樞』決氣）

こうして、わたしたちは、『黄帝内経』の『老子』の引用は技術論の装飾であり、より本質的、構造的な親和性は『莊子』にあるという結論を得たとしてよいだろう。だが、行数を費やした割りには、今回の主題はまだ、半分しか語れていない。より重要なのは、『黄帝内経』に近くて、同時代性を感じさせる『莊子』は、どの時代の『莊子』で、それは莊子学派の祖・莊周の初期『莊子』となぜ異なるのかである。さらに、それは中国伝統の古い天道観や気思想とどんな関係にあり、熊野弘子論文が指摘するごとく、儒家の養生観との繋がりも強い『黄帝内経』にとってどんな意

味を持つのか、というややこしい問題なのである。

それに答えることができれば、わたしたちは、前回の末尾で述べた熊野への異論に自ら決着をつけることができる。すなわち、『莊子』には、「目は見る所なく、耳は聞く所なく、心は知る所なくんば、なんじの神は將に形を守らんとし、形は乃ち長生せん」（在宥篇）と、肉体の長生を肯定する篇がある。『老子』第52章にも、「其の兌（あな）を塞（ふさ）ぎ、其の門を閉ずれば、終身つかれず（兌・門＝目、耳、鼻、口などの感覚器官）」と長生術と解釈できる文章がある。熊野は、これらの章句を排除した純粹『老子』、純粹『莊子』を想定し、タオとのスピリチュアルな一体化を願うがゆえに身体の健康に重きを置かない道家の養生論は、『黄帝内経』には影響がないとしているが、それはほんとうか。『老子』『莊子』という、超越的な精神性に彩られた書物に、時代が進むにつれて、身体の養生論が混じってくる矛盾をどう解くのか、というのがわたしの異論であった。

これは、『黄帝内経』の背景となる時代思想をより深く知るために、避けて通れない関門なのである。だが、もはや読者諸兄姉も以上の込み入った議論を追ってお疲れになったことだろう。続きは、次回への積み残しとしよう。

（注1）谷中信一の論文「戦国時代後期における「大一統」思想の展開」（『日本中国学会創立五十年記念論文集』汲古書院、1998）、「『管子』勢篇に見る黄老思想の分析」（『史艸』47号、2006）はこのことに自覚的である。

 ツイート  0

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

HOME

HUMAN WORLD
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [お宝市場](#) | [求人天国](#)

株式会社 ヒューマンワールド

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.